慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アリストーテリーズの貨殖論
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.1 (1921. 1) ,p.27- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210101-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

い。隨つて公衆が「ソヴエレイン」を輸入することは、之を禁止し、密輸入に對しても、嚴重に取締らなければならぬ。

第五、印度の通貨制度を完成する見地から云へば、金貨幷に金地金の輸出入を自由にすることは、極めて必要であるが、此事たる、若しも「ルーピー」が金地金に對して、一定の比率を保つに至つて、始めて實行されるのである。

千九百十九年の委員會に於て、以上の所論を力説したのは、印度事務省財務次官エフ、エッチ、ルーカス氏であつて、從來の如く磅貨と「ルーピー」貨との間に於ける比率の動搖して、二三個月の內に、政府の偶發的意嚮で、何等の豫告なく、改正される非を難じ、今日まで此弊害は避け難きものであつた、然しながら是れは公開市場に起る變動と違つて、商業家自ら商業上の原則に基ひて、之を豫知することを得ないと云ふ點に於て、大なる不確實の分子の含まれる弊害の存することを認めなければならぬ」と説明した、亦以つて從來の制度に對する一般の意嚮を卜す可きである。

アリストーテリーズの貨殖論

高橋誠一郎

一

アリストーテリーズに依りて使用せられたる「自然」なる名辭の用途は洵に區々たりと雖も、而も彼れが倫理學及び政治學上に於ける斯概念の適用に關しては眞に不明瞭なるもの毫も存することなし。彼れが倫理學及び政治學上の著作中に於ける「自然」なる名辭の重要なる用法は單に二個あるのみ、第一は、彼れが人は訓練に、先立ちて一定の自然的(即ち生得、遺傳の)衝動を有することを說ける場合の如く、「本原的」なる文字に代へて「自然的」なる文字を使用せるものにして、第二は理想に代へて「自然」なる文字を使用せるもの即ち是れなり。即ち彼れの言の如く、前の意味に於ては家族は「自然に」國家に先立てるものにして(Eth. Nic., VIII. xii, § 7)、後の意味に於ては國家は「自然に」家族に先立ち、家族は又た個人に先立てるものなり(Pol., I.

ii, § 12)。概して言はゞ是れ等の兩意義は截然明確に區別せらるゝなり。

然れども、アリストーテリーズすら、彼れが單に人間社會の一層複雜なる階段に屬するの意味に於てのみ「不自然」の程度大なることを證明せる富の技術の諸形態を非難せるに際し (Pol., I. viii-xi)、是れ等兩意義の間に於ける致命的にして且つ絶えず再現する混亂に由りて誘はれたるの觀あり。然れども吾人は經濟上の事項に關する彼れの意見を判斷するに當り、彼れが良國市民の生活が如何に在る可きかの理想、即ち貨幣營利の生活を排除するの理想を抱懷したることを記憶せざる可らず。(David G. Ritchie, Natural Rights. A Criticism of some political and ethical conceptions, 1895, p. 28.)。

二

アリストーテリーズは其の「政治學」第一編第三章に於て、家の支配は第一、人に對し、第二、物に對するを述べ、既に隷屬關係に就きては、第四章以下第七章に亙りて之れを說明せるを以て、之れに就きて再言するを止め、第八章以下に於て、物に對する支配に論入せり。(三田學會雜誌第十四卷第十二號所載拙稿「アリストーテリーズ」の奴隷論」參照)。

貨殖術 (χρηματιστική) は經濟術 (οἰκονομική) と異る。經濟術は主として欲望滿足に於ける富の消費及び是れ等の欲望に應ずるが爲めに蓄藏せられ得可き底の必要及び有用なる貨物の準備を包括し、貨殖術は金儲及び交易を包含する富の取得を取扱ふ。アリストーテリーズは χρηματιστική なる語を最廣義に於ては自然及び不自然の收入の兩者を包含せる一般取財の術 (κτητική) と同意義に使用し、又は狹義に於ては時に家事經濟の一部たる自然的收入の意義に使用することなきに非ざるも、而も多くは單に物々交換、及び可成りに著しき高に於ける貨幣交換に由りて可能たらしめらる可き財富取得の技術に限定せるなり。這般の混亂は半ば一般の商工業より地產を分離せんとせる其の徒爲なる試圖より生じたるものなり。

取財は自然及不自然の兩者に分たる、後者は交易 (μεταβητική) の誘入を通じて生じたるものなり。自然の富が家に對するは宛も母乳の幼兒に對し、自然の準備せる常食が草食及び肉食動物に對するが如し。取財の自然的形態は(一)牧畜(二)狩獵及び(三)農耕の三者に分たる。即ち牛羊等の家畜を飼育せる者の遊牧生活、果樹の栽

培を包含せる農耕、砂糖の殆んど全く知られざる場合に重要なる養蜂、其の他養禽及び養魚等は生活を支持する自然的方法と看做されたり。而して野生の動物を狩りて其の肉若しくは皮を求むるも亦た自然なる取財の體樣にして（漁撈も亦た同一項目中に入る可きものなる可し）、戰爭の技術（ἡ πολεμική）も或る意味に於ては取財の技術の一部たる可きものなり。何となれば戰爭に依りて奴隸たる可く生れたる人間を狩るは本來正當なることに屬するが故なり。（I. viii.）。眞の富は貨幣より成るに非ずして自然の生産物より成るなり。

吾人の所有する總べての物は二個の可能なる用途を有す。兩者は洵に物其の者に屬するも、而も同一の體樣に於て屬するに非ず。何となれば一は全然其の物に固有にして、他は不適當若しくは第二位的のものなり。例へば一個の靴が或ひは足を覆ふが爲めに用ひられ、或ひは他物に對して交易せらるゝが如し。或る者が過剩を有し、他が其の必要以下に有するの事實より自然（κατὰ φύσιν）に發生せる最初の單純なる物々交易（καπηλική）は自然に反するものに非ずして、人間自然の欲望滿足の爲めに必要なるものなり。最初の共同團體たる家に在りては、一切の物は共同に所有せらるゝが故に交換の存在す可き餘地なきこと明かなり。交換は獨り共同團體を構成する者の數が擴大するに至りたる時に發生するなり。然れ共自然によりて供給せられたるものにして人間の存在に取りて必要なる一切のものゝ準備は、縱し前以て手近か（ἐπιδοχεῖον）に存せざるも本來家事經濟に屬す。そは高に於て制限せらるゝも（οὐκ ἄπειρος）、尙ほ十分に獨立（αὐτάρκεια）と幸福なる生活とを維持せしむ可き純眞なる富の充用及び準備の二者を行ふ。而も斯くの如き富の充用は其の主たる任務なり。然れども這個の物々交換より貨幣（νόμισμα）の用を生じ、そは驟がて交易の標準及び共通の尺度として案出せらるゝなり。貨幣は最初は單に其の量目及び大さに從つて固定的標準を有したるも、後に至りて其の面に其の顯然たる價値の記號として一定の刻印を押捺せらるゝことゝ爲る。貨幣に關して二個の相反する思想あり。一は富（πλοῦτος）を以て或る者の所有せる通貨（νομισμα πλῆθος）の一定量より成るものと做し、他は貨幣を以て自然には何等の價値なきもの（ἄγονος）にして、單に不定なる契約に由りて之れを有するものと做し、從つて若し之れを使用する人々の意向にして變化せんか、そは無價値と爲り、如何なる必要

なる目的にも資することなきに至る可しと說く(アリストーテリーズは、爰にプラトーンの著と稱せらるゝ Eryxias 中に主張せらるゝが如き、キニーク學派の所論を指して言へること疑ひなき所なり)。洵に貨幣は富に非ず。斯くて貨幣を以て包圍せられたる人が往々にして其の必要なる食物を缺くことあるなり。ミダス王の物語は克く這般の事情を傳ふるものなり。是れに由りて人々は富と財産とを通じて他の或る物を覓むるなり。純然たる貨幣取得は自然的富と異なる、而して後者は經濟の眞の目的なり。貨殖の人爲的形態と經濟術とは前者が其の貨幣收集の事業に於て何等の限界存せざるに反し、後者は人間の欲望及び必要に由りて制限せらるゝの事實に於て相違す。(其れ自體目的なる物は無限なり、例へば幸福、健康及び德の如し、而も助成的の物は是れ等のものが手段たる可き目的に由りて限定せらる。τέλος は finis idealis にして πέρας は finis realis なり)。貨幣の蓄積は οὐ κατὰ φύσιν なり。此の意味に於て貨殖は又た經濟の一部たるなり(I. IX.)。

即ち貨殖の術は嚴密に經濟の術の一部を成すものに非ずと雖も、而もそは之れに役立つ(ὑπηρετικὴ)ものなり。然れども斯くの如きは獨り其の自然の形態に於て存するのみ。何となれば、其の人爲(μεταβατικὴ)の形態に於ては直接自然の目的に貢献することなきが故なり。加之ならず、其の極端の發達なる貨金業(τοκιστικὴ, ὀβολοστατικὴ)に於ては、そは全然不自然(παρὰ φύσιν)なるが故に、嫌忌す可きものなり。即ち此の場合に於ては吾人が財産の增加は貨幣其の者より生ずるものにして、之れを其の所期の目的に使用するに由りて生ずるに非ず。蓋し、貨幣は交易の爲めに案出せられたるものなるに、利子は之れを增加するが故なり。而して是れに由りて利子は τόκος 即ち「所産」の名を得たり、蓋し産せられたる物は總て其れ自身其の親に類似するものにして、利子は單に貨幣より生れたる貨幣に過ぎざればなり。(I. IX.)。

III

貨殖の術は實際上(一)(α)農耕(β)牧畜を包含する自然のもの(κατὰ φύσιν, οἰκειοτάτη)、並び に(二)(イ)海商(ναυκληρικὴ)(ロ)運輸業(φορτικὴ)及び(ハ)店商業(παράδοσις)を包含する(α)大小商業(ἐμπορία, κατηλική)(β)貸金業(c)精練及び不精練の兩者を包含する被備勞働(μισθαρνία ἡ μὲν τῶν βαναύσων τέχνων ἡ δὲ ἀτεχνῶν)より成る商的(μεταβατικὴ)にして不自然なるもの(μὴ κατὰ φύσιν)に分たる。アリストーテリーズの意見に據れば、自然

に奴隷たる者の存在する場合には雇傭勞働者は幾分自然に反するものにして、其政治的理想に於て適當なる地位を見出し得ざるものなり。是等假僞の取財形態と必須なる交換とは兩者が等しく貨幣を取扱ひ、相重疊する（ἐπαλλάττει）するが故に、往々にして混交せらるゝを免れずと雖も、而も彼れ等の目的は全然相異れり。後者は貨幣の蓄積（αὐξῆσις）を以て手段として取扱ふに對し、前者は之れを人生最高の目的として觀るなり。必要なる貨殖は生活必需品の供給及び使用に關するものにして、其の本源の職能は收益の本然の處理に存するが故に、自然にして且つ限定せられたる敬重す可き職業なるも、假僞の收入は不自然、不正にして他の損失に於て自己を富裕ならしむるものなり。然れどもそは貨幣の發明の結果として後者より論理的に生じたる癤（κατὰ λόγον）なり。而も之れを遂行する眞の理由は物質的物件に對する不善にして無制限なる欲望を滿足せんとするに在り。そは單に貨幣を通じて（διὰ χρημάτων μεταβολῆς）貨幣を產し、而して其の始初も終末も無制限なる通貨に在るなり（τὸ γὰρ νόμισμα στοιχεῖον καὶ πέρας τῆς ἀλλαγῆς ἐστιν）。極端なる欲求は驅がて餘贅（ὑπερβολήν）を要求するなり。

是れ等兩種の中間に在りて伐木（ὑλοτομία）及び各種の採鑛（μεταλλευτική）等の如き第三の貨殖形態あり。W. J. Ashley が其の Aristotle's Doctrines of Barter (Quarterly Journal of Economics, November 1895.) に於て解明せるが如く、οἰκονομική の特徵は曾だに自然の產物の直接收得たるのみに非ずして又た其の直接使用に存するに反し、不自然なる收得は是れ等の性質の孰れをも有することなしと觀る時は、最も克く個中の意義を了解するを得可し（同 pp. 333 ff.）。即ち此の中間の貨殖形態はそが自然的資料の直接收得を包含する點に於て前者と等しきも而も直接自己の使用の爲めに收得せずして交易を目的とせる點に於て後者と相同じきものなり。

此の種實際的知識の利益はミレトスの哲學者タレースの例に依りて明かなり。即ち人が彼れの貧困を嘲りて、宛も哲學は無用なりと做すに等しき口吻を漏したる時、そは猶ほ冬の候なりしに拘らず、彼れは其の星占學上の鍛錬を以て、同年は橄欖の收穫豐富なる可きを知り、彼れは少額の擔保を以てミレトス及びカイオスに存したる油の壓搾器を全部買占めたり。而して製油の時季に至り、之れを有利なる條件にて貸出して巨利を博せり。斯くて彼れは哲學者にして若し富貴たるを

選ばゞ、そは彼れに取りて容易なるも、而も此の如きは彼れ等の企圖する所のものに非ざることを知らしめたり。そは又た國家に取りても私家族に比し更らに高き度位に於て有用なるものなり(Pol. I. 12.)。

四

富は目的に對する手段(ὀργανον οἰκοῦ)の集合にして、其目的は人欲の滿足に存するが故に、富は人間の主たる目的たること能はず。凡ゆる行動は一定の「善」(τὸ ἀγαθὸν)を目的とす。即ち善は希求せらるゝ一切のものなり。(Eth. Nic. I. 1, § 1)。而して其の目的の或る者は他の或る目的に從屬し、同時に又た、總べてのものは一の主たる目的に從屬す。即ち吾人が一意其のものゝ爲めに努力し得るものにして、絶對、最大の善(τέλος)なる一の究竟、最高なる目的存せざるを得ず(ibid, § 2)。然らば最高の善にして、人間希求の至上の對象は何ぞ(IV, § 1.)。凡ゆる人間の活動の目的は概ね幸福(εὐδαιμονία)に存す。幸福のみ獨り其れ自體の爲めに欲求せられ、而して或る他のものゝ爲めにせらるゝことなし(VII, § 5.)。然れどもアリストーテリーズは幸福の條件を決定す可き準度を主觀的感情より誘導せずして、生の活動の客觀的性質に推原せり。「幸福」は存在の美と成全其の者に存す。此の成全よりして各個人に生ずる快樂は、其の價値の安んずる基礎に非ず、又た其の範圍の依賴する所にも非ずして、單に之れが結果に過ぎざるなり。凡ゆる生物に取り善は其の活動の成全に存す。斯くて又たアリストーテリーズに從へば、そは人間に取りては特に人間的なる活動の成全に存す。人間は精神(νοῦς)に由りて凡ゆる他の生物より區別せらる、而してそは彼れに在りては動物的靈魂と結合せられたり。人間に特有なる能力の實現は理性と一致し理性と離るゝことなき精神の活動なり。而して德は其の使命と和合せる理性の活動なり。從つて人間の幸福は德と一致せる精神の活動に存す。而も若し德にして一つならずとせば、最良にして最全なる德と一致せるものなり。而して吾人は尙ほ「完全なる生活(βίος τέλειος)に於ては」なる語を附加せざるを得ず。即ち一羽の燕も、一日の日も、何れも一季の春を成さゞるが如く、一日若しくは短少なる時間は或る人をして吉祥且つ幸福ならしむることなし(vii, § 12.)。

若し又た理論的及び實際的なる二種の活動及び二連の德を區別す可しとせば、

思想の科學的若しくは純正的活動は更らに價値あるものなり、實際的活動若しくは倫理的德は幸福に取りて第二位の構成要素なり。加之ならず、生活の成熟及び成全は幸福の一部なり。小兒は未だ何等完全なる活動(ἀρετή)の力なきが故に、幸福たること能はず。貧窮、病患及び災禍は幸福を妨害し、有德なる活動よりして富と力と勢とが之れに對して確保する援助を撤去す。人は充分なる外界の財と閑暇なくして人間に特有なる能力を發現すること不可能なり。人は彼れが最高なる善に到達せんことを期望し得るの前、先づ一般市民に普遍なる世間的富を領有せざる可らず。所得なくして善なること難し。門地、愛兒、交友、美貌なくして又た幸福なること能はざるが如し(viii. §§ 12-14; ix. §§ 7-8.)。

若し知性が人と比較せられたる時、神的ならば、之れに從ふの生活も亦た人的生活と比較せられたる時は神的なる可し(x. vii. § 11.)。吾人は諸神を以て勝れて多祥幸福なる可く忖度す。而もエンディミオンの如くに眠れるものと想像せらるゝことなく、萬人皆な彼れ等が生き、從つて又た活動するを忖度する神々に倫理的行動及び生産を認めずとせば、瞑想以外に何物を殘す可きや。斯くて「神性」の活動は多祥なる點に於て凡ゆる他の者に超越するが故に、そは瞑想的ならざる可らず、斯くて又た人的活動の内、之れに對して最も近く相結べるものは最も幸福ならざるを得ず(ibid. viii. §§ 8, 10, 11.)。從つて最高の理想は哲學者の生活なり、而してそは閑暇(σχολή)を必要とす(ibid. vii.)。而してそは又た一定量の富の基礎なくして享有せらるゝこと能はざるなり。

之れに次げる最善の生活は善良なる市民によりて示さるゝが如き完全なる倫理的德のそれなり。理知的幸福は道德的幸福に勝れり。理知的德が分立別異なるに反し、倫理的德は人間の合成的本性に屬し、且つ其の或る者は尙ほ吾人が肉體的本性の結果にして、又た欲情と連結せるの觀あり(ibid. viii. §§ 1-4.)。理知的幸福は倫理的幸福に比して外界の財を要求すること遙かに少し、後者は資力、財源及び機會なくんば不可能なり(§ 5.)。然れども尙ほ何れの場合に在りても、外界の富が幸福に對するは、宛も立琴の調に對するが如し。美妙なる彈奏は樂人を俟たずして行はるゝことなし。(Pol. VII, xiii.)。內部的秀性のみ獨り幸福の積極的構成要素なり。是れに對して外部的財及び肉體的財は單に消極的條件として關聯するに過

ぎず、極限の災禍と雖も尙ほ善良なる人をして悲慘（ἄθλιος）ならしむることなし（縱令ひ、そは彼れの幸福を妨ぐることある可きも）。（Eth. Nic. I x. § 10.）。

富は一切の幸福の究竟原因（αἰτία）に非ず。富は方便にして、嘗つて目的たることを能はざるものなり。アリストーテリーズは其の「政治學」に於て純眞なる（ἀληθινός）富の屬性を擧げて曰く、幸福なる生活に取りて必要なること、家族に對すると等しく國家的團體に取りても亦た有用なること、蓄藏（θησαυρισμός）に適すること、之れを蓄藏するを任務とせる者の手近に存し、然らざる迄も直ちに取得し得可きこと、其の獨立せる所有（κτῆμα）は無限にあらざること（οὐδὲ ἄπειρος）（縱令ひ、ソローンは富に關しては何等の限界も人間に對して定めらるゝこと能はずと稱するも）是れなり。純眞なる富は究竟の善に資する所のもの（τοῦ ἀγαθοῦ χάριν）なり。而して自然に從へる富は無限に非ずして、各個の場合に於て頗る明確なる定限を有す。そは或る者をして生活の主たる諸目的を確保せしむ可き以上に出づ可きものに非ず（Pol. I. viii.）。何等の定限なきものは惟り蓄財家の富あるのみ。財貨の交換價値は稀少性に依りて量定せらるゝも、而もそは人生に對する其の眞實の價値の標準たるものに非ざる可し（Rhet. I. vii. 14. καὶ τὸ θαυμαστότατον τοῦ ἀγαθοῦ, ὃν χρυσὸς σύμβολον διηρθρώσατο, ὅτι ἄλλον μὲν τρόπον τε ἀγαθὸν τοῦ παντὸς, ἐπὶ πολλοῖς τοῦ βίου τῶν ἀναγκαίων ὑπερέχειν· τὸ γὰρ πολλοῖς τοῦ βίου τῶν ἀναγκαίων ὑπερέχειν· ὅθεν λέγεται ὑπόδειγμα μὲν ὕδωρ.）。

五

アリストーテリーズは諸貨物の生產中に包含せられたる勞働の不同を理由として、各種貨物の間には交易の起る前に於て比例的等一（κατὰ τὴν ἀναλογίαν ἴσον）存せざる可らざるを觀たり。即ち彼れは貨物の價値は幾分生產者の價値に依りて決定せらるゝものと思料したるが如し。公正なる交易は報償として同一のもの（τὸ ἀντιπεπονθὸς κατ' ἰσότητα）を受けざる可らざるに非ずして、比例的報償（τὸ ἀντιπεπονθὸς κατ' ἀναλογίαν）によりて調整せられたる相互的行動なり。斯くて農民が靴匠に對すると等しく、靴匠の製作は農民のそれに對して正確に同等の價値を有す可きものなり。而して凡ゆる收益が量定せらる可き共通の標準は必要（χρεία）なり。洵に需要は凡ゆる商取引を接合せしむる紐なり。何となれば、吾人にして何等欲求する所のものなく、若しくは、さばかり多からずとせば、又た何等の商取引なく、若しくは、さ

ばかり多くの商取引存せざる可し。然れども物々交換の下に在りては、一定の利那に於ける交易當事者の具體的所要は其の一致を見ること稀なる可きを以て、公正なる交易は實際上不可能と爲る。是に於て乎、貨幣は需要に代る可きものとして誘入せらる。貨幣は凡ゆる物をして比較量定し得可き（συμβλητά）ものたらしめ、價値の尺度（πάντα τοῖς χρήματα）を供給するに由りて著しく交易を容易ならしむるも、而も其の性質を變化せしむることなし。貨幣が需要に代るは自然に由れるに非ずして、法律（νόμῳ）に由りて然るものにして、又た之れを變じ、之れを無用ならしむるは吾人自身の力に存するが故に、それは νόμισμα（貨幣）の名稱を有するなり。斯くて貨幣は契合に由れる需要の交換的代表物（ἐπιλλάγμα τῆς χρείας κατὰ συνθήκην）なりと定義せられたり。（Eth. Nic. V. v. §§ 3-7, 11-12.）。

貨幣は又た將來の交易に對する保證（ἐγγυητής）たるを得るものなり。貨幣を齎す者は必然其の要求する所のものを取得す可きものなればなり。貨幣も亦た他の貨物と等しく價値の變動を免れざれども、而もそは彼れ等に比して確固たるなり。斯くて貨幣は凡ゆる物の尺度として之れを比較量定し得可きものたらしむるに由りて、之れを等一化するなり。何となれば、交換なければ商取引なく、等一なくんば交換なく、又た比較量定せらるゝの可能性なくんば等一存すること能はざればなり（οὔτε ἰσότης μὴ οὔσης συμμετρίας οὐδ' ἀντιστρόφος καὶ συναλλάγων）（ibid. § 10）。アリストーテリーズは又た比例的報償（ἀντιστρόφος κατ' ἀναλογίαν）に由りて政治的社會は結合せらるゝものと觀たり。（ibid. § 2.）。Karl Marx は後年、此の大思想家すら交換せられたる物が有するの觀ある通有的要素及び交易が一見彼れ等をして等一の價値たらしむるが如き事實に由りて迷はされたるの事實に注意を向けたり。吾人は言ふ、五個の寢床は一個の家屋と相等しと。Marx 曰く「寢床の價値が家屋に依りて表明せらるゝを許す等一なる或る物、共通なる實體は何ぞ。眞に斯くの如きものは存在し得ず（νῇ μὲν οὖν διχῇ εἶναι τοῦτο）とアリストーテリーズは言ふ。然らば何が故に存在し得ざるか。寢床と對比して家屋は、それが寢床及び家屋の兩者に於て事實等一なるものを代表する限りに於て、等一なる或る物を代表す。而してそは人間の勞働なり」と。（Das Kapital. I. S.）。

蓋しアリストーテリーズの交換並びに公正なる價格に關する理論は其の正義論の適用として表明せられたるものなり。而して彼れの正義論は實に中世を通

じて永く自然法の基礎と爲れるものなり。彼れは報償と責罰(κέρδος と ζημία)との正確なる分賦を以て其の目的と做せり。而して彼れは普遍的正義の一部として又た特殊の公正を區別せり。そは法が利得の爲めに破毀せられたる時、侵犯せらる可きものなり(ibid II. § 1-4.)。而して彼れは公法及び私法に關して又た之れを分配上の(διανεμητικήν)正義と矯正上の(διορθωτικήν)正義とに區別せり。第一のものは受領者の價値又は效績(κατ' ἀξίαν τινά)に從つて國家の人員の間に分賦せらる可き名譽、利益及び其の他のものゝ分配に關するものなり。斯くの如き分配は市民の特權が家柄、富又たは個人の學識藝能に基くやに從つて相同じからず。配分は常に畫一なる標準に依つて決定せらる可く、そは這般の標準に從つて過少若しくは過多たるを許す可きに非ずと雖も、而も這般の標準其の者が何たるやは各國家の組織に由る。第二のものは任意的契約(συναλλάγματα ἑκούσια)に際しては其の兩當事者に對して利得及び損失の平衡を維持し、而して非任意的なる法律的手續に於ては犯罪と刑罰との平衡を維持し、總べて平等の破毀を矯正するに在り。そは個人の價値に對して何等の顧慮を行ふことなし。而してアリストーテリーズは第一のものに對しては幾何學的比例の原則、第二のものに對しては算術的比例の原則適用せらるゝものと主張せり。正義は平等を意味す。平等は過不足間の中庸なり。斯くて公正は中庸たるなり。而して矯正上の正義は損失と利得との間の中庸なり。此の原則の活ける權化は判事なり。遮莫、損得と云ふが如き名詞は初め任意的交換に發したるものにして、賣買、其の他、法が保護を與ふ可き凡ゆる取引に於て、或る者が自己のもの以上に有するは利得にして、其の本來有したるよりも少く有する者は損失を蒙れるなり(ibid, II. § 8.—IV. § 10.)。

斯くて正義は諸他の德と相異る。即ち他の德は、例へば勇氣が向不見と怯懦との間の中庸なるが如く、兩極端の間に於ける中庸の氣習なるも、正義は兩極端の間に於ける中庸に非ずして、其の對象たる物(τὸ ἄτομον)は過多及び過少間の中庸なり。而して不正は兩極端に存す(ibid. V. § 13.)。

六

第十九世紀の初葉に於て自由制度の裡に潛む陰暗たる影に驚き惱めるSismondiは、依然「Adam Smithの學說は亦た吾人の學說たる」を認むると共に古典派經濟學の

方法、目的及び實際上の結論に對して反對の地位に立たざるを得ざりき。彼れの意見を以てすれば、古典派の學者に取りては經濟學は「富の科學」なり、アリストーテリーズの謂ゆる貨殖論(chrématistique)なり、然れども斯學眞個の對象は人間若しくは少くとも其の物質的安寧ならざる可らず。單獨に富を思料して、人間を忘却するは正に出發點を誤るものと謂はざるを信ず。而して「總括的なる富の蓄積は國家の目的に非ずして、其の市民の總べてが其の富の表示する生活の快樂に參加するに在り」と觀たり(Les nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population, vol. ii, p. 50; vol. i, p. 9.)。斯くして彼れは經濟學の主たる目的たる可きものは單に抽象的なる富の生産に非ずして、寧ろ其の公平なる分配に存することを論爭せるなり。

而して、中庸を以て最良なりと做せるアリストーテリーズは、所有に關してすら寧ろ中間の狀態を選ぶ可きものと觀たり。即ち斯くの如き狀態は理性に從ふの傾向最も多きものなり。頗る優美なる者、頗る强健なる者、頗る高貴なる者若しくは頗る富有なる者、又たは之れに反して頗る貧窮なる者、頗る虛弱なる者若しくは頗る卑賤なる者は之れに從ふこと困難なり。第一の階級は著しく(ὑπεραίροντες)暴慢且つ不信にして、他は横道且つ卑屈と爲る、而して暴慢と卑屈との必然的結果たる幾百の不正は彼れ等をして等しく一族の首長若しくは會議の議長(φύλαρχοι)たるに不適當たらしめ、又た是れ等のものは共に國家に取りて有害たるなり。富者及び其の他の者は母乳と共に獨立を吸飲し、長ずるに及んで、命令に服從することを知らず又た服從せんとするの意志なし。之れに反して貧者は其過度の窮迫に由りて一切の品位を喪ふなり。一は支配するの資格なくして、唯だ奴隷の如く服從するに反し、他は如何なる支配にも服從するを知らずして、唯だ暴君の如く命令す。斯くて都市は主人と奴隷との集合に過ぎずして、毫も自由民の存在を見ざるに至る。一は憎惡し、他は侮蔑す、社會の精神たる友情と互惠とは那邊に之れを見出す可き。人は途上に於てすら、其の敵と聯合することなし。(Pol. IV. xi.)。

アリストーテリーズは更らに語を續けて曰く、斯くて中層階級の基礎の上に最完全なる政治社會は存せざる可らず。而して斯くの如き階級が多數にして他の二階級の結合せるもの若しくは少くとも其の分立せるものに對して優越せりとせば、其の都市は必然最も良く統治せらるゝを得可し。自己を一方に投ずるに由

りて平和を確保し、勢力の偏重を抑制するものは此の階級なり。從つて適度にして合宜なる所有を有するは市民の最大なる幸福なり。統治にして有すること多きに過ぐる者、若しくは有することの少きに過ぐる者の手中に存せんか、そは暴惡なる煽民政治と爲るか、然らざれば專制的寡頭政治と化するなる可し。而して激烈なる民主政治及び倨傲なる寡頭政治は直ちに僭主政治に導くなり。而も其の社會の人員が殆んど互に平等なる場合は斯くの如き虞れ遙かに稀れなり。中層階級のみ獨り暴動の虞れなし、此の階級の多數なる所に於ては社會を攪亂す可き躁暴及び叛亂を生ずること稀なり。而して同一の理由に基きて廣大なる國家は人民の蜂起を見ること最も少し。即ち彼れ等に在りては中層階級頗る多數なるが故なり。然れども小市は屢々二個の陣營に分割せらる。即ち此處には中層階級を殘すこと少くして、一半は富有に、他は貧窮なるを以てなり（Ibid.）。

斯くて古き「家計術」と新しき「營利術」とを對立せしめたるアリストーテリーズは、軈て又た世界の歷史と共に古き貧富間に於ける軋轢の眞因を極めんとせり。紀元前第四紀の大思想家の聲は宛も昨日に於て發せられたるが如くに吾人の耳に響くなり。

（一九二〇年十二月十三日夜）

ロオドベルトスの經濟學說補遺（一）

小泉信三

（一）

ロオドベルトスの價値並びに分配理論に就ては既に兩回に亘つて其大要を記述し、且つこれに多少の論評を加へ試みた（「ロオドベルトスの勞働價値學說と平均利潤率の問題」國民經濟雜誌第二十九卷第三、四號所載、「ロオドベルトスの地代論とリカルドオ」三田學會雜誌第十四卷第十、十一號所載）。今本篇の專ら主題とするところは、遺稿「資本論」中に於ける彼れの恐慌及び資本學說である。此書は著者の死後九年にして、一八八四年A. Wagner の委托を受けたTheophil Kozakの手で刊行せられたもので、題して Das Kapital. Vierter socialer Brief an von Kirchmann von Dr. Carl Rodbertus-Jagetzow. Herausgegeben von Theophil Kozak. と云ふ。標題の示す通り von Kirchmann 宛の第四公開狀として書かれ、一八五〇―五一年に公にせられた第一第二第三書